1 発掘調査の概要

旧大乗院庭園の調査（平城第336次）

大乗院は、かつて南都随一の名園と讃えられた庭園です。財団法人日本ナショナルトラストによる保存修理事業に伴う調査として、奈良文化財研究所では1995年から国指定名勝旧大乗院庭園の発掘調査をおこなっています。

大乗院は一乗院とならぶ興福寺の門跡寺院であり、一乗院から遅れること約100年後の11世紀半ばに創立されました。大乗院門跡は有力貴族の子弟を迎え、平安、鎌倉、室町、江戸時代を通じ、社会的、経済的に強大な権力を誇り、その庭園は各時期を通じ、名高い庭園であったことが、文献資料などから

現地説明会風景

読みとれます。

今年度の調査区は西小池の推定位置にあたります。江戸時代末に描かれた『大乗院四季真景図』には西小池が描かれていますが、現在では埋没してしまっています。今回の調査では、西小池の北部分が姿を現しました。

調査区北側では、昨年度の調査でも検出された漆喰池の続きや階段状石組、石組溝などが検出されました。また、池の北側には、それらから流れこむ水を浄化するための浄水施設があり、絵図からは読みとれない池の細部が、今回の調査で明らかになりました。

12月8日には、一般の方々にむけた現地説明会を開き、約180人の方々にご参加いただきました。調査は12月末までの予定で、断ち割り調査を通して、西小池の造成時期などに関する解明を目指します。

平城宮第一次大極殿院西楼の調査（平城第337次）

平城宮跡では本年度、第一次大極殿復原事業が起

工されました。大極殿は四周に回廊を巡らせていて、これに囲まれた部分を大極殿院と呼んでいます。今次調査は、大極殿院復原事業の事前調査です。調査地は大極殿院の南端、南面回廊の中央に開く大極殿院閤門（こうもん）の西側です。調査面積は1260㎡。

調査地から閤門を挟んだ対称の位置では、1972年に発掘調査が行なわれ、南面回廊の北半部に食い込むような建物があったことがわかりました。このとき掘り上げられたのが、平城宮跡遺構展示館に「平城宮最大の柱」として展示されている掘立柱の柱根です。その大きさから、この建物は高い柱をもつ楼（ろう）閣（かく）建築であったと推定され、「東楼（ひがしろう）」と呼んでいます。

発掘現場

発掘調査は、東楼と対称の位置に西楼（にしろう）はあるか、西楼の規模と構造は東楼と同じか、をテーマとしました。10月11日、まず調査区西半から着手。確認できた遺構は、西楼取り壊し後に敷き詰められた小石層、西楼の掘立柱抜き取り痕跡と礎石の据え付け痕跡、回廊礎石の据え付け痕跡、大極殿院内庭に敷かれた小砂利など。それらはまさに東楼を折り返した位置に現れました。

今季の調査は東半の小石層を確認して、しばしお休み。東半の遺構確認や柱穴の掘り下げは来年度実施する予定です。はたして「最大の柱」を上回る巨大柱根は眠っているのか。（平城宮跡発掘調査部）